

Beobachten, beschreiben und bedenken! 既に40年近い昔の戦時中、診断学の授業にて教わったこの言葉は、いまだに頭の中に深く刻み込まれている。

この beobachten (観察する) は、患者が診察室に入ってくる歩き方を診るところから始まるのだとも言われたのであるが、生きた人体を包み込んだ皮膚は、この beobachten の対象として、すこぶる大切なものの1つであろう。大切なものでありながら、しばしば内科医はないがしろにしているのではないかという気がする。

かくいう筆者も、関心は持ちながらも知識に乏しく、何か異常を認めると内科疾患との関連の有無を中心に皮膚科専門医の教えを受けている。消化器を専門に、特に内視鏡を取り扱う医師は内視鏡を通じて粘膜所見は精細に観察し、わずかの異変についても的確にその部の生検をしてゆくという訓練を積んでいる。その状態は、体内深部に存在する粘膜について、体表の皮膚と全く同様に観察し、かつ組織検査も可能となったと表現されているのであるが、その比較される皮膚については、皮膚が提供している情報を十分に認識するだけの受入れ態勢を持っているのであろうか。

本誌はそのような反省も込めて編集されたものである。本号は悪性病変との関連についてであり、症例報告を含めて、各論文は、それぞれ lehrreich である。このほかにも全身状態を反映していると考えられる皮膚の所見を広くとらえることができるようになりたいものである。読者諸氏のますますの御研鑽を祈るものである。

<岡部 治弥>